

主 題：礼拝者の資格

聖書箇所：詩篇 15篇

テーマ： 聖い神様を礼拝するのにふさわしい者とは？

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは詩篇 15 篇です。まずお読みしますので聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。

詩篇 15 篇 ダビデの賛歌

「:1 【主】よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。:2 正しく歩み、義を行ない、心の中の真実を語る人。:3 その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行なわず、隣人への非難を口にしない。:4 神に捨てられた人を、その目はさげすみ、【主】を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。:5 金を貸しても利息を取らず、罪を犯さない人にそむいて、わいろを取らない。このように行なう人は、決してゆるがされない。」

さて、ダビデによって記されたこの詩篇 15 篇は今を生きる私たちひとりひとりに大きく関わる大切な質問を投げかけていました。それぞれが自分のこととしてよく考え、吟味すべき大切な質問です。それは聖い神様の前に立って主に礼拝を捧げることのできる資格を持った人物、主の主、王の王である方が受け入れてくださる礼拝者とは一体どのような存在なのかということです。ダビデは礼拝者に関して詩篇 15 篇で問いを投げかけ、その答えも詩篇 15 篇の中で記していました。これから私たちはその質問の答えをともに見ていくのですが、その前に少し先週の内容を思い出してみてください。先週私たちが見た詩篇 14 篇では、生まれながらの人間は例外なく神様の存在を否定して歩む無神論者であることが教えられていました。詩篇 14 : 1 には「愚か者は心の中で、『神はいない。』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。」とありました。神様の存在は自然界や私たちの良心を通して誰の目にも明らかにされているということをみことばははっきりと私たちに教えてくれていました。それにもかかわらず人は生まれながらに主を拒み、自分の望むままに、自分の欲に従って好き勝手に生きようとしている愚か者であり、神様を否定して生きていく私たちはすべてその思いや考え、意思や心や体、足の先から頭の先まですべて罪に汚れ、腐り切っている。そんな罪深い私たちは、生まれながらにただ主の御怒りを受けるべき者だったのです。そしてそんな主の前に善を行うことなど誰ひとりとしてできなかった私たちは自分の行いや努力でもって自分自身を救い出すこともできるはずはなく、私たちはただ主の正しくて聖い裁きの前に恐れおののくことしかできない存在として生きていたのです。

ですから本来主の前に礼拝をすることができるのは誰かという質問に対して、この世には主の救いに値するような者も、また聖く正しい神の前に出てこの方に受け入れられる礼拝者も誰ひとりとして存在してはいませんでした。しかし、感謝なこと、罪の中に住んでいた私たちを主が恵みでもって救い出してくださったのです。希望など一切なく、私たちにはどうしようもなかった罪の問題を、主が代わりに犠牲を払うことで解決してくださった。前回も見ましたけれども、エペソ 2 : 8-9 に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」とありました。こうして主があわれみを示してくださって、キリストにあつて義と認めてくださったからこそ私たちは今罪を赦された者として希望を持って生きて行くことができる、それこそが詩篇 14 篇でダビデが私たちに教えてくれたメッセージでした。誰ひとりとして主の前に礼拝を捧げることができなかったけれども、そんな私たちを主の恵みを変えてくださったのだと。

さて、こうしてイエスキリストを救い主として受け入れた者の罪は赦され、主の前に出て礼拝を捧げることがよしとされました。しかし、これは何もこの聖い神の前に出るに当たって、私たちがどんな態度でそれを行っても問題がないというわけではありませんでした。私たちに救い出してくださった聖く正しい主を礼拝するのに、私たちはそれにふさわしい態度が求められていたのです。そして、それこそがこの詩篇 15 篇が教えているテーマでした。主の前に受け入れられる真の礼拝者とはどのような存在なの

か——。皆さんももうよくご存じのとおり、救いを得たクリスチャンたちは救いを得てそれですべてが終わったわけでも、救いを得ればその後は自分勝手に、かつての自分のように思いどおりに生きていけばいい、そんなことを聖書は教えていませんでした。先ほど見たエペソ2：8-9の続きにも10節に「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」と書いています。かつては自分の思いのままに、サタンを主人として生きていた者を主が恵みによって救ってくださったことによって、新しく生まれ変わり、キリストを主人として生きる「良い行ない」をする者として主が造り変えてくださった。もちろん私たちが主の前を主のみことばを守って、主のみことばを実践していくこと、その行いが救いをもたらすわけでは決してありませんし、主に何かを認めてもらうために私たちがみことばを實踐するわけでもありませんけれども、救われた者は皆例外なく、私たちの愛する主が聖いようにその聖さを追い求めてキリストに似た者になることを心から望んで生きる者として生まれ変わったのです。だからこそ新しく造りかえられた私たちが主の前に出て礼拝を捧げる時、そこにはそれにふさわしい態度が存在しています。ではその礼拝者にふさわしい態度とは一体どのようなものなのでしょうか？主に受け入れられる真の礼拝者としての歩みは一体どのようなものなのでしょうか？きょうはそのことを詩篇15篇を通して一緒に考えてみましょう。

詩篇15篇は大きく3つの部分に分けることができます。礼拝者に関する質問と答えと約束です。ダビデはまず礼拝者として私たちがいつも自分自身に問いかけ続けるべき質問を1節に、そしてその質問に対する答えとして真の礼拝者の持っているべき霊的な資格を2-5節、最後にその資格を満たしている者に与えられる主の約束を5節の終わりに記しました。私たちはきょうもこのようにして、主の前にそれぞれ礼拝を捧げています。しかしどうかいま一度このみことばを通して自分自身の心をよく吟味してみてください。私たちは主の恵みによって救われ、そして主の前に立つことをよしとされました。しかし、それはどんな態度でも主の前に立っていいということではありません。主の恵みによって救われた者にふさわしい、私たちの歩みはこの主の前に立つのにふさわしい、そんなあかしをきょう立てているのでしょうか？ダビデがこの詩篇で教えているように、主の前に受け入れられる礼拝者としてきょうを生活しているのでしょうか？このみことばが皆さんの信仰の吟味と助けとなり、そしてますます主に似た者になっていきたい、私を救ってくださったその主を愛して、みことばを實踐する者として変わっていきたく願う励ましとなることを心から願っています。

1. 質問：礼拝者としてふさわしい者は？ 1節

さて、まず私たちは1節でこの詩篇の中心となる一つの質問を見ることができます。「【主】よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」、「【主】よ。」とダビデはここでも呼びかけていました。ほかの詩篇でも彼は自分と個人的な関係にある契約の神に向かって呼びかけています。ここでも私の主よ、誰があなたの幕屋に宿るのですかと質問していました。ここで「幕屋に宿る」ということばが出てきていますが、この「宿る」ということばは「一時的に滞在する」とか「一夜を過ごす」という比較的短い期間その場に居座ることを表すことばです。またダビデはその後に「だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか」とも尋ねていました。ここで出てきている「あなたの聖なる山」、つまり契約の箱が置かれたシオン——エルサレムに住むことができる人は一体誰なのですかと彼は問うていたのです。この「住む」ということばは、先ほどの「宿る」と比べるとより長い期間を、もっと言えば永続的にその場に住みつくことを意味しています。これらのことをまとめて考えると、ダビデは別にここで二つの異なる質問をしようとしたわけではなかったということです。ここで「幕屋」とか「聖なる山」と別々の場所を出していますが、これは別に別の場所に住むことができるのは一体誰なのですかと尋ねたかったものではありません。むしろ「幕屋」や「聖なる山」ということばは単に主の臨在を象徴しているに過ぎないのです。ダビデが本当に聞きたかったのは、一日、一週間、一月そういった短期間、いや永続的に主と交わりを持ち続けることができる人物は一体誰なのだろうかということでした。

ある人たちは、この詩篇15篇が主を礼拝しに聖所へとやって来た者たちに門番たちが訪ねたものではないかと考えています。神殿に入って礼拝をしようとしている者たちに対してその心を吟味するために、この「【主】よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」

という質問が投げかけられたのではないかと考えられています。いずれにしても、主の前に礼拝を捧げるのにふさわしい生き方をしているかどうかをダビデは問うていました。

この質問は、今日の私たちにも当てはまります。私たちはそれにふさわしい態度、ふさわしい形で主の前に出る必要がある。私たちが好き勝手にこの聖い主の前に出て行って礼拝を捧げることができるわけではない。これは救われるために「良い行い」をしなければならないという話ではありません。私たちはどんな行いをして主の前に認められることはありません。救いはすべて神様の恵みの技によるものです。しかし同時に、恵みによって救われた者たちは主を喜ばせる者として生きて行きたいと聖化を追い求めていく者へと変わったのです。私たちが主の前にどのように歩んでいるのかは主にとってとても重要なものだということです。もしかしたらある人は「私は主を知っている」、「私は主を信じている」と口では言うかもしれませんが。しかし礼拝者にとって最も大切なことは、私たちの信仰とその歩みが一致したものであるかということです。私たちが信じていることや知識として知っていることと実際にどのように生きているかを見比べた時に、そこに大きな違いがあったらそれは大きな問題なのです。どのような生き方をしているのか、主に造り変えられた者としてどのように聖さを求めて生きているのか、そのことが大切だということです。みことばも Iヨハネ 2：4に「神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」と書いていました。また、イエス様もマタイ 7：21で「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と書かれました。

では、私たちの今日の歩みは主の前に喜ばれるものでしょうか？きょうこうして聖い神の前に礼拝を捧げているのですが、私たちはそれにふさわしい生き方をしているのでしょうか？もし、この聖い神様を礼拝するのにふさわしくない歩みを私たちがしているとすれば、私たちは礼拝を捧げるよりもまずこの主の前に出て行って、悔い改めることが必要になるのです。

2. 答え：礼拝者にふさわしい10個の資格 2-5 b節

では主に受け入れられる、主との交わりを持つことをよしとされる礼拝者とはどんな存在なのか、ダビデはその答えを2-5節の中で記してくれています。特にここで人の振る舞いとことば、人との関係、お金といった四つの分野において、礼拝者としての歩みにふさわしい10個の資格を見ることができま。ではどのようなものがあるのかを一つ一つ見ていきましょう。

A. 振る舞いに関して

1) 非難されるところがない 2 a節

まず一つ目の資格として挙げられているものは、非難されるところがないということです。2節の初めに「正しく歩み」とありました。この「歩む」ということばは、この人物の日々の生き方、また習慣的な振る舞いを表しています。また「正し」というのは、この人物の生き方が罪の一切ない完璧なもの、完全なものであるということではなく、その人物が誠実であること、またその人物を周りから見た時に、その人物のうちには責められるような問題やキズが一切ないということの意味しています。つまりこの人物の生き方は罪を全く犯さないということではなく、人が見ていようが見ていまいが、どんな時も、どんな場所にあっても、主の前に喜ばれることを自ら進んでなそうとしている者だということです。ここで使われている「正し」ということばと同じことばがああノアに対しても用いられていました。創世記 6：9に「これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」とあります。ノアも私たちと何ら変わらない罪人でした。しかし彼はいつも主を覚えて、主とともに歩もうとしていました。同じように、主の前を正しく歩もうとする者たちは誰からもその歩みを責められることがないように、いつも主のみことばに沿って生きようとしているのです。確実に言えることは、この人物は例えば日曜日、教会にいる時や人の目がある時は正しい行いをして、残りの月曜日から土曜日や人が観ていない時はこの世と何ら変わりのない生活、振る舞いをしているというような者ではないということです。その人の生き方のどの面を取ったとしても、主のみことばに喜んで従って、みことばを實踐しながらキリストに似た者へと変わりたいと強く望んで生きている人物だということです。

2) 喜んで主の前に正しいことを行う 2 b節

また、ダビデは続けて「義を行ない」と記しています。礼拝者にふさわしい二つ目の資格は、喜んで主の前に正しいことを行うということです。ここで「義を行」うとありますが、これは何もその人物が自分で考えてよいことを行うということを表しているわけではありません。「義を行」うというのは神様が決めた基準に則って、みことばに則って道徳的に正しい行いをするということです。主に礼拝を捧げようとする者は自分の生活におけるすべての面において神様のみこころを求めて、たとえ失敗したとしても、みことばに忠実に従って行こうとしているのです。この人物はただ口だけの者ではないということです。みことばを愛していると口では言いながら、その実生活はみことばに逆らうようなことをしている、そんな者ではありません。ヤコブはこの信仰と行いの関係について、ヤコブ2：14-17で次のように言っていました。「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、『安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。』と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」と。たとえどれだけ熱心にことばでは主をほめたたえていたとしても、たとえどれだけ長い間教会に通ってたくさんの聖書の知識を持っていたとしても、もしその歩みがそれを否定するのであれば、その人の信仰は「死んだもの」、空しいものだ。本当の信仰は必ず主にある正しい行いを日々の生活の中に生み出すものです。主がその人のうちに働かれるからこそ、その人は正しい行いをしたいという願いを持って生きて行く者として今を歩んでいるのです。

3) 真実を語ろうとする 2C節

そして三つ目に挙げられている礼拝者にふさわしい資格は真実を語ろうとするということです。真の礼拝者はただ正しいことを行うだけでなく、その話すことばにおいても嘘や偽りではなく、いつも真実を語ろうとするのです。ここで特に皆さんに注目していただきたいのは、この人物が「心の中」で真実を語ると言っていたことです。前回も見たように、「心」というものがその人の本当の姿を表わす場所だということが繰り返し教えられていました。私たちが考えることも、抱く感情も、意思や動機といった私たち自身のすべてを表わす場所、それが「心」でした。そしてその「心」こそが私たちの中心であるからこそ、私たちの行動や振る舞い、ことばがすべて「心」から出てくるのです。前回見た愚かな者たちは「心の中で、『神はいない。』」と言っていたからこそ、彼らの生き方は腐り切った、主の前に忌み嫌われる行いでした。私たちの主は何をするか、何を口にするかもご覧になりますけれども、何よりも人の「心」にあるものを見ておられる。だからこそ誰ひとりとしてこの主をごまかすことができる者はいないのです。そしてもし私たちがただ口先だけで心ない偽善的な礼拝を捧げているのであれば、主はそんな礼拝を拒まれます。イエス様もイザヤ書を引用して、マタイ15：8-9の中で「『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」と言っていました。

さて、今日の私たちの歩みは主に喜ばれる、人から非難されるところのないようなものでしょうか？それとも誰にも言えないような、公にされると困る問題を隠しながら生きている、そんな歩みでしょうか？私たちの振る舞いや話すことばは私たちが信じているみことばの真理と一致したものでしょうか？それとも私たちの振る舞いは私たちが信じているものとは大きなギャップのある偽善的なものでしょうか？残念ながら罪を犯さないクリスチャンはいません。私たちは皆完璧ではありません。しかし問題は罪を犯してもその罪を正直に告白して、悔い改めて再び主の前を正しく歩み続けて行きたいと願って生きているかどうかです。

B. ことばに関して

4) 人の陰口を言わない 3a節

ダビデは振る舞いに続いてことばに関して3節の中で「その人は、舌をもってそしらず」と記しています。四つ目の資格として挙げられているのは人の陰口を言わないということです。主の前に出て来ようとしている者は人の陰口を言わない。ここで使われている「そしらず」ということばは興味深いことば

で、直訳すると「歩いて行く」とか「ひそかに探る」、「スパイをする」という意味です。つまり真の礼拝者というのは、悪意あることばを言いふらしながら歩き回らない、陰に隠れて人の悪口やゴシップを流さない人物だということです。聖書を見ても、陰口をたたくような人物、悪口を言ってほかの人を傷つけるようなことをよしとはしていないことは明らかです。

特に箴言ではそのことが繰り返し教えられています。例えば箴言 20 : 19で「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。」、また 11 : 13では「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。しかし真実な心の人には事を秘める。」とあります。主を愛する者は誰のためにもならない陰口を口にしたり、またほかの人の秘密を漏らして噂を広げようとはしない。かえっていつも「愛をもって真理を語り、」（エペソ 4 : 15）、「必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話」す（エペソ 4 : 29）ということです。

5) 人を傷つけるような悪を行わない 3b節

また五つ目の資格として、ダビデは「友人に悪を行なわず」と続けていました。要するに、礼拝者にふさわしい者は人を傷つけるような悪を行わないということです。真の礼拝者は友人が傷ついたり、悲しむようなことにつながることをよしとはしません。ここで「友人」とありますけれども、別にこれは自分と親しい関係にある者、自分によくしてくれる、自分のお気に入りの人だけを指しているのではありません。私たちがその日その日に出くわす人々に対しても、その相手がどんな人であったとしても、真の礼拝者は振る舞いやことばにおいて人を傷つけるような悪や罪を行わないということです。

6) 非難をすぐに鵜呑みにしない 3c節

そして六つ目にダビデが記した礼拝者の資格は人への非難をすぐに鵜呑みにしないということです。3節の最後に「隣人への非難を口にしない。」とありますが、少し分かり辛いのでこのことばをそのまま直訳すると、「隣人に対する非難を取り上げない」と訳すことができます。要するに、主に受け入れられる礼拝者は自分の隣人に関して耳にする悪口や噂話、非難のことばをそのまま受け入れるのではなく、それが真実かどうかを判断して正しく見極めることができる人物だということです。耳にすることばに対して、何でもすぐに感情に任せて反応はしない。真の礼拝者はどんなことばを話すのかを気にかけるだけでなく、どんなことばを聞くのかにも注意を払うものだという事です。

私たちの歩みを振り返ってみれば、これは時に難しいことかもしれません。なぜなら私たちにとって陰口やゴシップというものは悪いとはわかっていても興味をそそられてしまう魅力的に見えるものだからです。例えば自分に嫌がらせをしてくるような人に関する噂話が流れてきたとしたら、本人がその場にいれば絶対に口にしないようなことを話している場面に遭遇したとしたら、私たちはそのような話に喜んで耳を傾けるような者でしょうか？一緒になって悪口を言ったり、陰口を言ったり、その話を聞く必要がない人に対しても、「ねえねえ」と口にしてしまう者でしょうか？私たちは普段の生活の中であって、どのようなことばを発しているのでしょうか？私たちの会話は話すことにせよ、聞くことにせよ、私たちの「心」にあるものを明らかにするものです。私たちの「心の中」にあるものがことばとなって出て来、私たちは「心の中」にある思いが聞きたいものを聞こうとします。ことばというものは、神様の前に重要なものだからこそ、私たちのことばがどうでもよいものではないと聖書の中に繰り返し教えられています。例えばヤコブ 3 : 9-11に「私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。」とあります。私たちのことばはどんな時も主を賛美し、主を喜ばせているのでしょうか？それとも主が耳をふさぎたくなるようなことばを私たちは話しているのでしょうか？人が見ている時も、人が見ていない時も、主の前に受け入れられる礼拝者は、ことばにおいて主の前を日々正しく歩もうとしている人物だということです。

C. 人との関係に関して

7) 主が憎むものを憎み、主が愛するものを愛する 4a節

また次にダビデは人との関係に関しても主と交わりを持つことができる礼拝者について教えています。4節の初めに「神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ」と記されていました。礼拝者にふさわしい七つ目の資格は、主が憎むものを憎み、主が愛するものを愛するという事です。

ここで「神に捨てられた人を、その目はさげすみ」とあります。これは言いかえると、今も神様を拒んで好き勝手に生きようとしている愚かな罪人たちの影響から、みずから離れて彼らと交際しないということです。真の礼拝者というのは、愛する主が忌み嫌っていることを喜んでしている罪深い者たちと、その誤った生き方をさげすんで、彼らと同じように生きて行こうとはしない。もちろんこれは私たちが周りの罪人たちを人として憎んだり、彼らを拒絶して一切関係を持たないと言っているではありません。私たちはこの地上にあって、まだその救いを知らない者たちのところに出て行って、その人たちを愛して福音を宣べ伝えるという責任を主から与えられています。しかし、主を礼拝したいと望む人物、主を恐れて主の忌み嫌われることを何よりもしたくないと思っている人物は、かつて自分を支配していたこの世の生き方、この世の欲に目を向けようとはしない。この人物は世を愛することが神に敵対することであることを知っているがゆえに、この世のはかない楽しみや誘惑に心を奪われることなく、主のみこころに従って生きようとするのです。

Iヨハネ2：15－17にも「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」と書いてあります。私たちの歩みにとってどんな人と交わりを持つのかは大切です。箴言13：20も「知恵のある者ととも歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害を受ける。」と書いていました。私たちがこの世を愛して生きている者と交われば交わるほど、私たちはかつての生き方に魅力を感じて心を奪われて時に罪を犯してしまうことがあります。私たちに大切なことは、主を恐れて同じように主のみことばに従って行きたいと願う者たちに仕えて、この者たちと一緒に主をほめたたえることです。

8) 誓ったことを最後まで守る 4b節

続いて八つ目の資格として挙げられているのは、誓ったことを最後まで守るということです。今節の残りの部分に「損になっても、立てた誓いは変えない。」と書いてありました。主の前を正しく歩もうとする礼拝者は、たとえそれが痛みを伴うことになったとしても、自分に不利益を被るようなことになったとしても自分の立てた誓いを、自分のことばを誠実に守り続けるということです。言い換えれば、状況が変わったからとか、状況が悪くなったから約束を破るものではないということです。私たちは自分の言ったことを最後までやり通すでしょうか？それともありとあらゆる言い訳をして、自分のことばを途中で曲げるような歩みをしていないでしょうか？周りの人が私たちを見る時に、私たちはその人たちにとって信頼される存在でしょうか？それともいつも偽りしか言わない、いつもことばを捻じ曲げて約束を破ってしまう、そんな疑いをかけられるような人物でしょうか？どんな犠牲を払ったとしても誓いを守るということは確かに困難が伴うことです。それぞれみんなここに難しさを覚えます。しかしかつての信仰の勇者たちは皆そのように生きていました。

例えばハンナのことを思い出していただくと、彼女は長年自分に子どもが与えられないことに対して、ひどく嘆き悲しんでいました。そしてその悲しみの中で主の前にこんな誓いを立てていました。Iサムエル1：11に「そして誓願を立てて言った。『万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主にささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。』」とありました。その後どうなったかはよくご存じだと思います。彼女の祈りを聞かれた主は彼女にサムエルという子どもを与えました。ここで少し彼女の立場に立って考えてみてください。ずっと子どもが与えられずにそのことで悩み苦しんでいた彼女のもとに、やっとのことで子どもが与えられたのです。どれだけ彼女は喜んだことでしょう。確かに主に捧げると誓ったけれども、やっぱり自分の元においてほしいと願って、約束を破ったとしても不思議ではなかったかもしれません。私の状況を知っている神様も理解してくださると言い訳をして、約束を反故にすることもできたかもしれません。しかし、彼女はそんなことはしませんでした。このように祭司エリに向かって言いました。その続きがIサムエル1：26－28に書いています。「ハンナは言った。『おお、祭司さま。あなたは生きておられます。祭司さま。私はかつて、ここのあなたのそばに立って、主に祈った女でございます。この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にささげたいと思います。この子は一生、主に

渡されたものです。』こうして彼らはそこで主を礼拝した。」と。主の真の礼拝者は自分の主が誠実で約束を守られるお方だということを知っています。私たちも主が約束を守られるお方だということを知っています。だからこそこの主に似た者になっていきたいと願う私たちは、どんな状況にあつたとしても自分のことばを守ろうとするのです。ハンナは念願としていた自分の子供が与えられ、状況が変わった後も主の前に立てた誓いを最後まで守り通しました。

私たちは自分の立てた誓いについて、どのように誠実に向き合っているのでしょうか？結婚されている皆さんは結婚の時に夫婦で立てた誓いを、また職場や教会、さまざまな場所で私たちが口にする約束に対して私たちはどれだけ誠実に向き合っているのでしょうか？時がたったから、状況が変わったからといって自分の立てた約束を簡単に反故にしていないのでしょうか？主の前に受け入れられる礼拝者は人との関係において主の前を日々正しく歩もうとしている者です。

D. お金に関して

9) 喜んで貧しい者と分かち合う 5 a 節

四つ目の分野であるお金に関して、ダビデは5節の初めに「金を貸しても利息を取らず」と記していました。九つ目の礼拝者の資格は、喜んで貧しい者と分かち合うということです。ここで「利息を取らず」とありますけれども、これは何もクリスチャンが働いてお金を稼いだり、収益を上げることにに関して間違っているということではありません。聖書はそんなことを教えているのではありません。では、ダビデがここで何を言わんとしたのかというと、それは貧しく困っている兄弟姉妹を助ける時には彼らからの見返りを求めるのではなくて、その人を愛するがゆえに喜んでその人の必要を満たしてあげることです。このことに関しては、出エジプト記22:25でも「わたしの民のひとりで、あなたのところにいる貧しい者に金を貸すのなら、彼に対して金貸しのようにあってはならない。彼から利息を取ってはならない。」と書いてありました。主を愛して、主にある家族を愛する信仰者は必要を覚えている人を見かけたら、自分が神様から与えられているその祝福を喜んで分かち合おうとする。そして彼らがそれを返すことができるまで寛大に振る舞おうと。真の礼拝者はお金や自分の利益を優先させるのではなく、いつも神様を優先させ、人に愛を示そうとするのです。

10) 人をだまして利益を得ようとしない 5 b 節

そして5節に「罪を犯さない人にそむいて、わいろを取らない。」と記されていました。主の前に受け入れられる礼拝者の10個目の資格は、人をだまして利益を得ようとしないということです。これまでも見てきたとおり、正しいことを愛される主を信じ、主に似た者にならなりたいと望む真の礼拝者は、貧しい者や弱い者を虐げたり、彼らをだまして不正に利益を手に入れようとはしないということです。主の前に受け入れられる礼拝者はお金に関しても主の前を日々正しく歩もうとしている人物でした。

3. 約束：礼拝者として歩む者の持つ確信 5 c 節

さて、ここまで主の前に礼拝を捧げるにふさしい者の持つ10個の資格について見てきました。私たちの振る舞いもことばも、人との関係もお金に関しても、この人物は主の前をいつも正しく歩もうとしていたのです。もちろん何度も言っていますが、私たち罪を犯さない者はいません。すべてを完璧にできる者も、みことばを自分の力ですべてなすことができる者もいません。私たちにはいつも主の助けが必要ですし、また罪を犯した時に主の前に罪を悔い改めて、主の赦しを求め続けることが大切です。そしてそこに赦しはある。

しかし同時に、私たちが神様の力に拠り頼みながらみことばを実践して、聖さを追い求め続けていくのであれば、そんな礼拝者には主がすばらしい約束を与えてくれているということを最後にダビデは記していました。その約束が5節の最後に「このように行なう人は、決してゆるがされない」と記されています。みことばが教えていることはシンプルです。主の前を正しく歩もうとする礼拝者は決して揺るがされることがない。確かに私たちは罪との葛藤を経験し、それに敗北を喫することもあります。また、私たちの周りの状況も変わっていきます。しかし、私たちのうちに主が働きを始めてくださった聖化の過程は主が成し遂げてくださるからこそ失敗に終わることはありません。私たちがキリストに似た者へと成長して行くことができるのは、何も自分たちの知恵や力がすぐれているからではなく、主ご自身が私たちのうちに志を立てさせ、みことばに従って生きて行くための力を与えてくださるからにすぎないのです。

主の恵みが礼拝者として私たちが造り変えてくださり、主の恵みが礼拝者として生きて行こうとする、聖さを求めて主に似た者になっていきたいと思う私たちの原動力として働いてくださる。わたしたちの主がともにいて、こうして私たちが放さずに捉えてくださっているからこそ、私たちはこんなに弱い者ですけれども、みことばに従ってキリストに似た者へと変わっていくことができるのです。私たちに力があるからではない。主が私たちの力として私たちとともに歩み、私たちに励まし強めてくださる。主が守り導いてくださるからこそ主の前を正しく歩もうとする礼拝者は揺るがされることが決してない。このことに関してイエス様も次のように語っていました。マタイ7：24-27に「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」と。今日の私たちひとりひとりの歩みは、このみことばを聞いても行わない砂の上に家を建てた愚か者としての歩みでしょうか？それともみことばに従って岩の上に自分の家を建てた主に受け入れられる賢い礼拝者としての歩みでしょうか？聖い神様の前を生きる礼拝者は主が守っていてくださるからこそ決して揺るがされることはないという確信を持って生きて行くことができるのです。

〇まとめ

さて、きょうは詩篇15篇を通して聖なる神様の前に礼拝を捧げるにふさわしい礼拝者がどのような存在なのかということを考えました。私たちはダビデが教えているこの資格を持って日々を歩んでいるのでしょうか？その振る舞いやことばは、いつもみことばに沿った主を喜ばせる、人から非難されるようなものでない。人を傷つけるような悪は一切避けて、いつも愛をもって周りの者の徳を高めることを実践して行く。私たちはそんな歩みができているのでしょうか？自分の立てた誓いは最後まで守り、必要を覚えて困っている者がいれば、喜んでその人を助けようとする。私たちはそのような歩みをしているのでしょうか？そしてたとえ罪を犯すことがあったとしても、いつも主の前にへりくだって悔い改めて、キリストに似た者になろうと日々を歩んで行こうとする。皆さん、主はご自身を礼拝しようとする者にこんな基準を求めておられました。私たちはこのような者として今を生きて行くことが求められていたのです。

もしまだこの中に主を自分の救い主として知らない方がおられるのであれば、そもそもまだあなたは主を礼拝することはできません。詩篇14篇が教えていたとおり、そんなあなたは今なお神様を否定し、この方の前に御怒りを積み上げているにすぎない愚か者として生きているのです。そしてそのような者には神の正しいさばきがあるということを聖書ははっきりと教えています。ですから主の救いが用意されているきょう、主の前にこれまでの自分の生き方を悔い改めて、この方を主として新しい歩みを始めてください。

主を愛し、主に似た者にならなうと願っておられる兄弟姉妹の皆さん、私たちは日曜のこの時間だけでなく、どんな時も日々主を礼拝する者として生きていくことが求められています。それは当たり前なことではありません。14篇で見たように、そもそも誰ひとりとして主を礼拝することができる者などいなかったのです。しかし、主の恵みによって私たちは主の前に立つことをよしとされたのです。恵みによって、私たちは主をほめたたえることができる礼拝者としての生き方を始めることができました。そしてそれだけではなく、主はそのような歩みをして行こうとしている者の歩みを守り導いてくださる。そして、この方のうちにあって、決して揺り動かされることはない。だとすれば、私たちの責任は礼拝者として、日々喜びながら生きて行くことです。みずから進んでこの主のみことばに従って、この主を礼拝する者としてともに成長し続けていきましょう。